

福井支部ニュース

2024年度 第7号

日本科学者会議福井支部

連絡先：山本雅彦、masahiko@mbp.nifty.com

郵便振込口座番号 00710-9-17967 日本科学者会議福井支部

支部ホームページ <https://jsafukui.net/>

科学者会議本部 <http://www.jsa.gr.jp/>

今号の内容

- ◆書評『引き裂かれるアメリカ トランプをめぐるZ世代の闘争』(小野一)
- ◆土竜時評 最近の報道からからみるジャーナリズム時評 (土竜百聞)

【書評】『引き裂かれるアメリカ トランプをめぐるZ世代の闘争』 及川順 (集英社新書 2024/10/17)

書評でこの言葉は避けるべきかもしれないが、あえて言えば「ユルい」。著者の仕事をリスペクトしないのではない。その逆である。複雑な政治現象を読み解くとき、あまりにも単純明快でシャープな説明図式は、むしろ警戒すべきである。また、どんなにバランス感覚をもって情報収集しても、一人の人間が見聞きできることには限界がある。それにもかかわらず現地へ赴き、人々のナマの声に耳を傾けつつ、錯綜し相矛盾する現実の中にもものごとの本質を見極めようとする態度は、ジャーナリズムの王道というべきだろう。

著者の及川順は、2019年夏から2023年夏まで、NHK報道局政治部記者としてアメリカに駐在し、2024年大統領選挙を見越して取材した内容をベースに本書をまとめた。タイトルが示すとおり、アメリカ政治の深

刻な分断化を若い世代の動向を中心に分析する。「第1章 分断を扇動する若者たち」では、トランプに近いとされる保守派の若者団体「ターニング・ポイント・USA」の大規模集会を訪問し、「第2章 分断に対抗する若者たち」では、対抗勢力としてのアメリカ青年民主社会主義者(YDSA)などへのインタビューを行う。価値観を異にする者どうしが罵り合い、対話が成立しない状況は若い世代にも及ぶが、希望がないわけでもない。「第3章 分断回避を試みる若者たち」ではエスニック・スタディーズなどの新たな試みに注目し、「第4章 若者たちはどこへ向かうのか」では、本書で取り上げた若者たちの立ち位置を俯瞰し、各勢力間の力学や化学反応を考察した上で、今後のアメリカ政治をどう見るべきかを考える。

本題に入る前に、確認しておくべき基礎知識がある。政治の話でしばしば出てくる

「右と左」ないしは「保守と革新」の対立軸とは、そもそも何なのか。冷戦秩序が崩壊した今、資本主義と社会主義のイデオロギー対立などではもはやない。西側陣営の盟主として反共を国是に掲げるアメリカでは、階級以外のアイデンティティ(人種、宗教、性的志向など)の比重が大きくなる。労働組合、黒人などのマイノリティが民主党支持、宗教色の濃い白人や富裕層が共和党支持というのがお



おまかな色分けである⁽¹⁾。(単純小選挙区制を基盤とする) 二大政党制では、批判勢力が既存の政党システムを通じて政治を変革する展望は事実上ない。こうした留保条件を承知の上で、わかりやすさを重視し著者が序章で整理した「アメリカの政治的スペクトラム」には、左から順に、急進左派、プログレッシブ、リベラル(中道左派)、無党派、保守(中道右派)、保守(極右)が並び、そこに、本書で取り扱う団体等の最新動向を書き加えて終章(第4章)で提示されるのが、図である。

第1章が頁数で半分以上を占めるのは、「ターニング・ポイント・USA」が強力に注目度の高い団体だから。企業から潤沢な資金援助を受ける。著者は、2022年12月にアリゾナ州フェニックスで開催された同団

体の年次総会を訪れた。愛国心を高揚させるクールな(格好いい)演出。カリスマ的創設者チャーリー・カークも登場。教育現場やキャンパスでの華々しい「闘争」を紹介し、保守の価値観の核心へと踏み込んでいく。著者によれば、カーク演説の背後には、アメリカの古き良き伝統がリベラルやプログレッシブの勢力拡大で破壊されているという危機感がある(53~54頁)。これだけだと在来の共和党保守的支持者層と同じに思えるかもしれないが、若さ、力強さ、スタイリッシュであることの三要素が若者たちを惹きつける(66頁)。地方支部の幹部や参加者へのインタビューも忘れない。敵と味方を峻別し、異なる思想を排撃(本書ではデーモナイズ=悪魔化と表現)するのは、(保革を問わず)攻撃的な団体の特徴といえる。だが、保守も一枚岩でない(このようなユルさこそ現地レポートの醍醐味であり、私たちが陥りがちなステレオタイプを打ち砕くのに役立つ)。評者の印象に残ったのは、黒人女性の若手活動家キャンディス・オーウェンズのことである。リベラル思想の持ち主だったが、「黒人は被害者であること」をいつも求められる価値観に疑問を抱き、保守に転向したという(68頁)。ユニークな思想遍歴だが、リベラルなり進歩派の弱点を突いているようで、考えさせられる。

第2章で扱われる左派(?)の若者団体には、保守派への対抗運動のようなどころがある。オバマ政権のリベラル路線への反発から保守派が活性化したのなら、どちらが先かは「鶏と卵」の関係かもしれない。保守派が最終的にはトランプ支持でまとまったのに対し、リベラル派がそれに匹敵する結束力を持つかは疑わしい。図に示す政治的スペクトラム上では、YDSAは、アメリカでは珍しく社会主義を標榜するサンダース上院議員⁽²⁾に近い。彼らには、バイデン、ハリスなどリベラル(中道左派)の民主党政治家は物足りないだろう。同団体幹部へのインタビューを通じ、著者は、対話により自分たちの姿勢を理解してもらおうとする態度に共感しつつも、保守派からは罵るような言葉で攻撃されるだけで対話が成立しないことへの諦めも感じ取る(148頁)。YDSA 年次総会の組織強化検討分

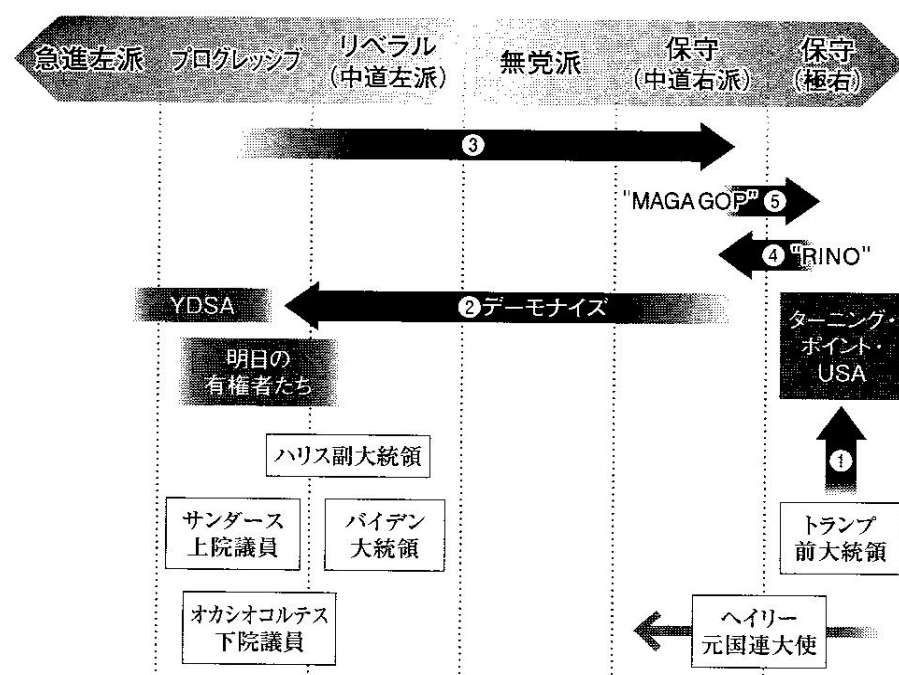


図 アメリカの政治的スペクトラム (本書 227 頁)

科会では、組織として間口を広くとり（人工妊娠中絶、気候変動、貧困・格差、銃規制強化などのテーマ）、キャンパス内で運動を活性化させることの重要性が説かれた。

どうすれば分断を回避できるかを考える第3章で、人種問題に重点を置き、非白人の視点からアメリカ史を学び直す教育現場の実践（エスニック・スタディーズ）が紹介される。このような観点から議論を促すための教材作成は、近年、保守的な州の学校で問題になっている「禁書」とは真っ向から対立する。とはいえ、事情は単純でない。「模範的マイノリティ」概念もそうである。差別に苦しむ旧世代マイノリティは、生き抜くため「模範的」たろうとしたが、それがかえって人種のマイノリティどうしの連帯を阻害し、白人による支配維持に寄与したとも考えられるからである（202頁）。単にアメリカ社会の差別構造が問題なのではなく、批判勢力の弱点を反省的に問い直した新しい戦略の必要性を示唆する点で、先に見た「黒人は被害者であること」を求められるリベラル思想への違和感から保守に転向した活動家の例と通じるものがある気もする。話は前後するが、第2章末尾では、「明日の有権者たち」で活動するベトナム系女子学生が紹介される。彼女は、保守派の拡大を懸念しつつも、楽観できる材料もあると考える。Z世代が投票に行けば、共和党圧勝を食い止めることも不可能ではないからだ（177頁）。

年配世代の感覚から「青臭い」と一蹴するのはたやすい。だが、アメリカ政治は、今、明らかな変動期にあり、その行方を見定める上で、若い有権者の動向は重要である。不確定要素は多いが、そうであるからこそ、現地レポートから学ぶものも少なくない。

（小野 一）

（1） 山口二郎『戦後政治の崩壊／デモクラシーはどこへゆくか』（岩波新書、2004年）85頁。

（2） 格差是正、富裕層への増税、国民皆保険、公立大学の無償化などを主張し若者に支持されたが、2016年大統領選挙の民主党候補者選びではヒラリー・クリントンに敗れた。

支部ニュースへの寄稿・投稿を

支部ニュースを支部会員間の交流の場とするため、積極的な寄稿・投稿をお願いします。

◆ジャーナル評論：「日本の科学者」「福井の科学者」の評論

◆時事評論、意見・見解

◆活動報告・経験報告・事例紹介

◆行事案内、会員への案内・お知らせ

その他、エッセー、書評、文芸作品の紹介など、何でも支部ニュース担当者までメールでお送り下さい。yamane@f-edu.u-fukui.ac.jp
ogura@u-fukui.ac.jp

【土竜時評】最近の報道からからみるジャーナリズム時評（その3）

—「司法監視」を放棄する第四の権力（マスメディア）—

58年前の袴田氏「冤罪事件」の静岡地裁の再審無罪判決が、検察が上告しない決定をして、やっと確定した。これについて、畝本直美検事総長が発表した「談話」⁽¹⁾で、起訴から1年以上ものちに「発見」された5点の味噌漬け着衣をめぐって「捜査機関のねつ造であることを断定した上、検察官もそれを承知で関与していたことを示唆していますが、何ら具体的な証拠や根拠が示されていません。」と強く抗議して、マスコミをにぎわした。しかし、当時検察は、「物的証拠」の着衣はプロボクサーの巨大な体格の袴田被告はそれが小さすぎて履けなかったのに、東京高裁の控訴審では、証拠も示さず縮んだ可能性があるとの指摘を盾に「経年乾燥によってズボンが縮んだ」「獄中で袴田が太った」などと主張して事件当時は十分に穿けたはずだとし、さらに高裁・最高裁がその判断を「認めた」。今回の静岡地裁再審判決はそれを除けただけなのだ。TV報道を含め大手ジャーナリズムは、そういう事実は報道したが、それだけだ。継続的・持続的な取材姿勢や検察批判・裁判批判、再審法や人質司法には、及び腰だ。

評者は、これは日本の司法界だけでなくジャーナリズム界の問題・課題だと思う。三権の一面を担うはずの「司法」が官僚化して政治権力に従属・迎合し、そして「第四の権力」である大手ジャーナリズムも同じ穴のムジナになっているように見える。「袴田事件」についても、この側面か

らもっと深堀りして報道し権力構造を暴いていくべきである。福井地裁で「原発を止めた」樋口英明元裁判長は、我々に光明を与えてくれたが、法曹界では圧倒的に少数派である。山本富士夫氏の書評⁽²⁾で紹介されていたが、最高裁で福島1F事故を担当していたエリート裁判官が、「天下り」先の大規模弁護士事務所東京電力担当弁護士として、最高裁時代の経験を生かして活躍している、というのは驚くべきことである。しかし、残念ながらこのことを報道ニュースや記事で知ることは、なかった。

「ひらめ裁判官」という言葉がある。「上ばかり見て仕事する裁判官」の意だ。たまたま図書館で借りた瀬木比呂志氏の『絶望の裁判所』⁽³⁾を読んだが、前世紀から強まった司法界の官僚組織化の赤裸々な様子が自身の経験とともに示されていた。瀬木氏は30年も務めた判事の世界を2012年に飛び出し、学者・研究者を目指し大学に転身した方である。その本に紹介されているエピソードがある。瀬木氏が出席していた最高裁判所の裁判官・調査官の合同食事会の席で、ある最高裁判事が「家の押入にはブルーページ関係の資料が山とある」と自慢げに話し、他の2人が「俺も」と大声で言った。瀬木氏は驚いたそうだが、評者も驚いた。評者の学生時代の1970年代は、今から思えば民主主義・平和主義運動の盛んな時代だったが、かたや権力側の攻撃も吹き荒れ日教組や総評が潰された時代でもある。NHKの朝ドラ「虎に翼」でも触れていたが、そのころ法曹界で激しい「青法協（青年法律家協会）攻撃」（ブルーページ、レッドページのもしり）が吹き荒れ多くの青年法律家が任官拒否にあい、「左派」的でも「反米」的でもない自由主義的な裁判官すら左遷された。発言した最高裁判事は、俺も若気の至りで青く染まっていた、という「自慢話」をしたのだ。

戦後の司法界は、松本清張の「日本の黒い霧」下山事件の時代から始まって、今や辺野古基地建設で沖縄県民の意思を無視した「国権の発動」を司法が堂々と判決で支える時代にまでなった。さらに「米軍には国権は及ばない」との趣旨の判決まで出る始末だ（本気なの？）。瀬木氏の本で紹介されていた事例では、市民が自衛官官舎にビラを各戸配布すると住居不法侵入罪で有罪になった。かたや告発された裏金議員はほとんど不起訴・嫌疑なし。この日本の司法の「三権分立」危機を、「第四の権力」たるマ

スメディアは等閑視してないか。次の、その次の、将来世代の日本は「Big Brother」が支配するジョージ・オーウェルの「1984年」になる？

（土龍 百聞）

(1) <https://www3.nhk.or.jp/news/html/20241008/k10014604621000.html>

(2) 『東京電力の変節 ― 最高裁・司法エリートとの癒着と原発被災者攻撃』後藤秀典 旬報社 2023/8/29。山本氏の書評は、2023年度支部ニュース第11号 2024/4/29発行に掲載。

(3) 『絶望の裁判所』瀬木比呂志 講談社現代新書(2014/2/20)。瀬木氏はこの後、「ニッポンの裁判」（講談社現代新書 2015/1/16）をはじめ多数の司法関係の書を著わしている。最新刊は『現代日本人の法意識』（講談社現代新書 2024/11/21）。

2025年前期の会費納入をお願いします

2025年前期の会費納入をお願いします。また、過去の未納会費のある方は、分納でも構いませんので、至急納入をお願いします。

＜＜編集後記＞＞

新年あけましておめでとうございます。2025年も会員諸氏のご活躍されることを祈念します。2024年度支部ニュース第7号をお届けします。

世界の温暖化情勢も政治的情勢も、悪化の一途をたどっています。TVニュースは米国のトランプ次期大統領関連のニュースが一杯です。大統領選挙中に100万ドルを支持者にばらまき、ファクトチェックを外したXのイーロン・マスク氏が、英国労働党政権を酷評・批判、独仏の政権もコテンパンで、欧米間に軋みを作り出しています。そのうち日本にも何か言うてくるかもしれませんが、さて石破政権は「反論」する？

（OG）

